

浄土

1995・10

ありのまゝの自己 藤堂恭俊台下
自己形成と仏教教育◇齊藤昭俊
法然上人と私◇梅庭昭寛
十夜法要縁起◇大室了皓

【連載】

楽屋ゆかた————— 関 容子

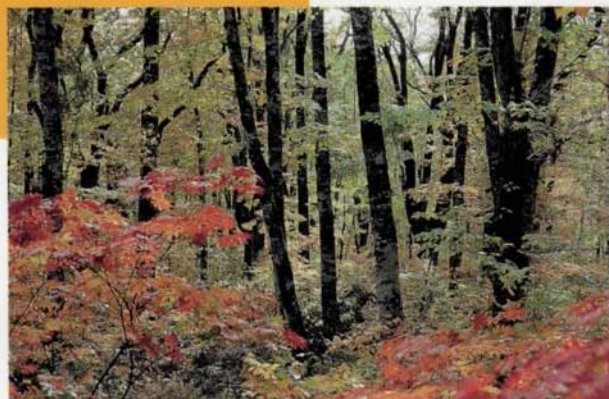
外国で生活して————— 谷地興文

新宗教と現代社会————— 武田道生

共に生きる————— 御所野洋幸

誌上特設ざらりい

遊行期 大島泰生の仏画





咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との
固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に
花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

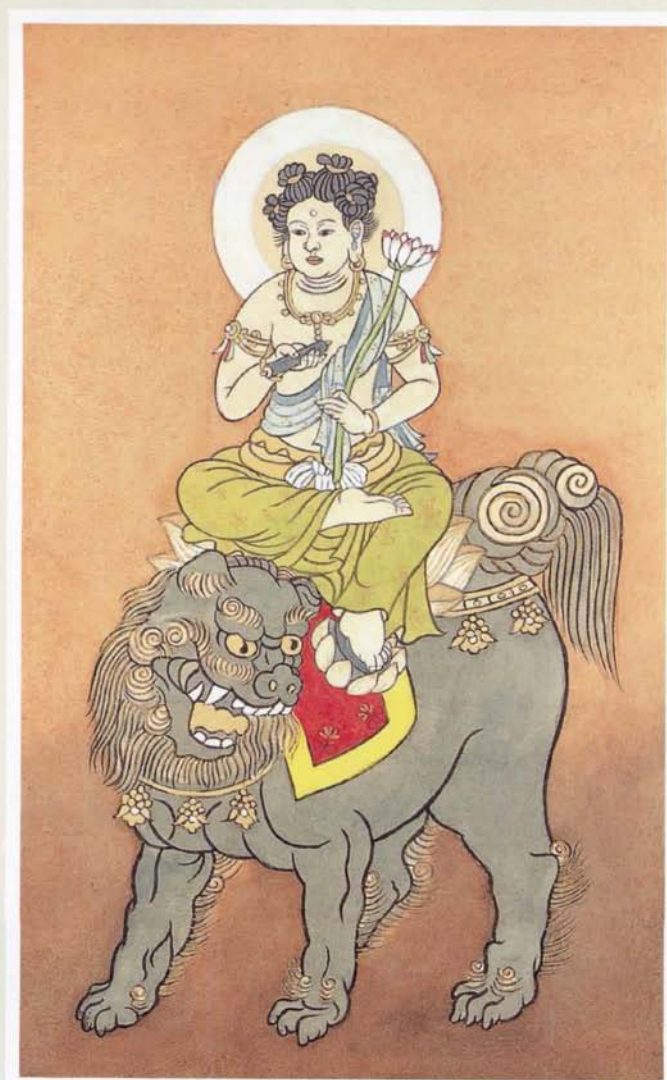
●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

遊行期

大島泰生(泰雄)の仏画



大日如来







ヒンドラバラタージャ

大島 淑

亡夫泰雄は、父が浄土宗の僧侶でしたので幼い時に得度を受け、寺で育ちました。大学は水産学科を出ましたので水産関係の仕事で大変忙しく暮しました。老後少し暇になってから絵を描き始め、孫や猫など描いて居りましたが、七十才を過ぎてから佛画を描く様になりました。先生にもつかず全くの自己流ですが、西光寺から大藏經を借りて来て勉強し、写真を見たりして線を描き、色や模様は自由に描きました。和紙を染め、ドーサを引いて下地を作ったり、膠を煮たり胡粉をとりたりするのは私の役目でした。最後の作品となった孔雀明王を描いた時は、本文の孔雀の羽を見乍ら楽しそうに色を塗って居りました。「今度はあれが描きたい。これが描きたい。」と意欲を示しておりましたが病気にはかてませんでした。それでも何時の間にか六十数点の画が残りましたので、一周忌を迎えるにあたりその一部を画集にまとめ、生前お世話になりました皆様にお贈りしたいと存じます。故人を偲ぶよすがともなれば何よりでございます。

「大島泰生(泰雄)作品集」(平成七年一月発行)あとがきより

浄土

じょうど



1995/10月号 目次

カラーグラビア遊行期	仏画=大島泰生	3
ありのままの自己	大本山増上寺法主藤堂恭俊台下	8
自己形成と仏教教育	斉藤昭俊	14
法然上人と私	梅庭昭寛	20
コラム		27
楽屋ゆかた中村助五郎(三)	関 容子	28
外国で生活して	谷地興文	34
コラム		43
共に生きる	御所野洋幸	44
十夜法要縁起	大室了皓	48
新宗教と現代社会	武田道生	54
コラム		62
Jフォーラム		63
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下

表紙撮影=御所野洋幸

アートディレクション=近藤十四郎

巻頭連載

ありのままの自己

——法然上人の心を探る(1)——

大本山増上寺法主

藤堂恭俊
台下

私はこの春、去年にひき続き、真野龍海先生の懇請を得て、祝辞をのべるべく四月十日、浄土宗関係の芝学園中学校の入学式に、紺衣姿の出立ちで舞台にたった。入学生制服といい、舞台に居並ぶ学園関係者の礼装といい、黒一色のたゞなかの紅一点として、注目を浴びたそうである。

小学校を終えたばかりの、あどけない紅顔の少年たちを前にして

入学おめでとう。みなさんは今、喜びの絶頂に達していることでしょう。それはあたかも、裾野をながく広げた富士山の頂上に達した感激にたとえられます。その入学できた喜びの背後に、ご両親の愛情あふれるあとおしや、先生がたの懇切熱心な指導のあることを忘れてはなりません。この尊い「おかげ」という裾野に対して、「ありがどう」という感謝のおもいを持ち続けて、その「おかげ」に報いることが、人間として一番大切なことであります。

と蕉辞をのべた。

しかし私は、「人に追いつき、追いこせ、負けるでないぞよ」と、叱咤激励にあげ暮れ

て、やっと入学を勝ち得た誇りに胸のはずむ少年たちは、自分の学力、自分の努力で入学したのだと、おもい込んでいることであろう。ましてや、入学できなかった友だちの負の感情、心の痛みなど、感じとる余裕はないかも知れないと思うと、一抹の憂いにおそわれた。が、一人ひとりの少年が、どうか、心のひろい、ぬくもりのある人に成長して頂きたい、と心から念ぜずにはいられなかった。

機会を頂くことができればこの少年たちに、法然上人の父上、漆間時国公が、夜討ちのために深い傷を負うて、みまかるにあたつて、愛しい妻子と郎党にむかつて、

われこの傷をいたむ、人また痛まざらんや。われこのいのちを惜しむ。人豈にをしまざらんや。わが身にかへて人のおもいを知るべきや。

—『本朝祖師傳記繪詞』卷第一—
と、息もたえだえに語り遺した自他一体感に基づくことばの心を伝えたい。

長年にわたつて教師として教壇にたつていた私は、ここ増上寺にお招きを頂いてから、

答案や卒業論文などに採点する仕事から解放された。とはいっても採点したり、審査することをとおして、教えられたことは決して忘れていない。

十人十色であるから人にもよるが、人はおおむね独りよがりをする。答案を提出してのち、完璧なできばえとは思わないが、そこそよい点数がとれるとおもった時の成績は、期待に反することが多い。しかるに、書き足りなかった、誤った解答をしたことに、自身が気づいた時の方が、案外よい成績であつたりする。万事すべてそのとおりであるが、自己評価もまたしかりである。ともかく、ありのままの現実をしかと的確に捉えるべきである。

『法句経』のなかに、次の聖句が語られている。

自己の心を師とし 他に随つて師となさざれ

自己を師となすものは 真の智人の法を獲る

この聖句にたいして友松圓諦先生は

おのれこそおのれのよるべ おのれを措きて誰によるべき

よくとどのへしおのれにこそ まこと得がたきよるべをぞ獲ん

と、訳されている。

この聖句では、ふたとおりの「おのれ」を説いている。一つは現に今あるありのままの「おのれ」であり、今一つはとどのえられた、あるべき「おのれ」である。前者は後者に基づき、それをよりどころとし、支えとすべきである、と教えるのがこの聖句の心である。それは、現に今あるありのままの「おのれ」は、人間の性^{さが}にふりまわされた生活をくりかえし、かさねているからこそ、よりどころ、支えを必要とする。

かの明恵房高辨上人（一一七三—一二三二）はその『遺訓妙出』のなかに

又云、我は後世たすからむと云者にあらず。たゞ

現世先づあるべきやうにてあらんと云者也。云々

と述べている。私はこの「あるべきやう」を『法句経』の「とどのえしおのれ」であろうと解したが、明恵上人の研究者、『明恵』（『人物叢書』60）の著者田中久夫先生は、僧として「ただ戒律を守るのがへあるべきやう」ということであると理解されている。して

みると、「帝王は帝王、臣下は臣下としてのあるべき姿を守ること」、つまり、それぞれの身分に応じた行動規範を守ることこそ、「あるべきやう」であると解される。

禪勝房が念仏のひとりだちについて、師の法然上人から拝聴したことは、

善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、たゞ生まれつきのまゝにて、念仏する人を念仏にすけき、ぬとは申す也。

であった。それは僧も、帝王も、臣下もおしなべて人である限り、生まれながらにして人間の性を具え、あまつさえそれに振りまわされている現実の自己に注目しての発言である。この「生まれつき」の自己、現実のありのままの自己にめざめればこそ、身も心も投げだし、阿弥陀ほとけにすがりまかせて、そのみ心のままに生かされて、生きられるのである。

聞思修

自己形成と仏教教育

斎藤昭俊



自己形成、自己の生き方は自己教育力、自己学習によるところが多い。学習と生活との相互作用の中で主体的に自己実現、共通の真実の発見をすることが、学習を総合的に働かせることになる。自己形成は他との相互関係において成り立つ。

自己学習は内的な動機づけは知的好奇心と向上心、自己への信頼、生死への目覚めがあげられる。自己学習をすゝめるには知識の取得、思考力、批判力を養うこと、仏教の聞思、修にあたる。

個人学習の方法としては書物などの刊行物、テレビ、ラジオ、通信教育などの印刷、放送媒体利用の方法と、図書館、博物館、寺院などの施設利用がある。

集合学習の方法としては、講義、講演、講座、音楽会などの団体、小集団学習があるが、内容的に仏教にかゝわるもの、広い意味の自己形成、生き方にかゝわるものであれば個人学習となる。集まった人達の相互教育作用はあまりなく、主に参加者個人の学習となる。

集団学習は集団内で相互教育作用が行われるもので、個人の欲求をみだし、教養を高め、共通の意識をもって、集団の目的を果そうとするものである。仏教では僧堂、小集団として寺院子弟養成などがあげられる。ここでは集団での目的と個人の欲求との問題がおこるが、共同学習者として、また各学習者をいかにすることが肝要である。各人の自己能力が集団の中で充分のばせることが重要であるが、集団の目的が求道を通しての自己実現にあるから、矛盾はしない。集団内では自己の見解を客観化することができ、自らが対決することによって明確にしていくという特長がある。

また、個人学習に対して集合学習は「情報の入手や交換において、学習の動機づけの過

程において、感情の浄化作用や仲間意識の形成において、技術を身につける過程で、理解や認識の深化過程において、社会的態度の形成において、態度変容や意志決定に際して、共同実践へ進む過程において」（斎藤・辻編著『社会教育方法論』）すぐれていると考えられている。自己学習の知的好奇心、知識の取得の段階、また批判力、思考力を育てる段階で、個人学習、集合学習、集団学習ともに有能な方法である。

仏教は更に、その上に自己の内的発見をとげる、自他一如の静寂な心境に達するために人里離れた山中で、または寺院で、または市井でも三昧に入ることができる。それは独りで行う修（聞・思・修の修）である。正師についてのたゞ一人の行う自己内開発であり、充実である。仏教の行修（修）には公案工夫、念仏澄心、只管打坐の三方法がある。指導者が修行者に公案を与える。修行者は坐禪堂で端坐して公案を工夫する。その答えをもつて指導者の室に参入する。これが公案工夫の禪である。坐って仏を念ずる。意識にのぼる仏の名をとえ、拝むことによって自己実現の境地に至るのが念仏澄心である。観念の法もこの種である。坐ることによって手足の調整から氣息の調整（身容端然、肚裏牢平、氣息咄修）をなすことによって静寂な心境、至高の境地に至ることを只管打坐の禪という。祈りにも内面的な、自己実現、仏心の交わりという個人的祈りと、仏教では集団的な祈りよりは集合的な祈りである。堂塔内で集合的に祈っても各人の祈りの面が強いと思われるからである。内面的智慧の展開において道理を会得することにある。その会得は密教では加持祈禱という修なしにはあり得ないから祈りという自己実現への実践によってあり得るのである。

念仏はその道理（宗）を知る智慧（体）によって、如来の本願である道理を覚ることである。金子大栄は「仏教に於けるさと」といふは、唯だこの智慧に依りて、道理を全得せることである。身行の智慧なきものに知られたるものは、知られたる道理であつて、覺られたる道理ではない。……親鸞にありては、其の宗とすべきは如来の本願であり、其の体とすべきは仏の名号（念仏）であつた。それ故に本願の道理も智慧の念仏にあらずば如実に信心せられない。洵に真宗の行信といふも、念仏を体とし、本願を心とする外はないのである。それは更に念仏の宗とするところは本願であり、本願の体とするところは念仏であるともいはれよう」（金子大栄『宗教的覚醒』と念仏について述べる。身行の智慧によつて道理を悟ることが念仏であれば、禪による方法、祈りによる方法、念仏による方法すべて悟りという自己実現へ向けての実践法である。

学習と仏教教育

自己実現には自己形成が必要である。自己形成には外なる道德規範と内なる自己規範がある。仏教では諸惡莫作、衆善奉行というが、これは外なる規範である。しかし、この外なる規範を行うには内なる規範が必要であると説くのである。道元は「仏道をならうというは、自己をならうなり」という。これは内なる規範を打ち出している。自己の確立、自己の形成、自己実現が仏道であり、自己において一切の存在に共通する真実を見ることがある。

内なる自己の実現には、第一に単なる知識ではなく智慧の開発が必要である。即ち学習である。学習は自己が自発的意志において、自主的に計画し、管理することである。「自己をならう」ことは所謂發菩提心に始まる。自ら管理することは持戒であり、忍辱であり精進である。明本は「志密なれば、行もまた密なり。功深ければ、悟もまた深し」と述べている。求道心菩提心が強ければ、行にもたえられ、行を徹底すれば深い証果が得られるという。確固たる發菩提心、求道心が先づ必要である。

次に智慧の開発である。意図的に、自主的に学ぶ学習によって知識、技術、態度を開発する。仏教という聞・思・修によって、知と行と信の一体となった智慧である。一般的に理実の認識、理論、思想における自己客体化、自明性の打破は智慧への足がかりとなる。

仏教では八正道の実践となる。論語に「子曰、古之學者为己、今之學者為人」とあるのは己のためにするのは利己的なものではなく、自己をならうことであり、人の為にするのは人のために奉仕をするというのではなく、人に見せるためのものであり、現代人が望む「偉くなりたい、人に認められたい、人に軽蔑されたくない」ものに相当する。現代人の自己開発は「知りたい、勉強したい、向上発展したい」という生の欲望に表わされる。現代人の欲望のもう一つの重要なものは「病気になるたくない、死にたくない」である。身体的に生きる、精神的に生きるという両者が端的に表わされているが、孔子の時代も、自己開発の目的と人に認知されることの目的のために学習したと考えられる。

正しい学習の目的は正しい師と和合衆によって得られる。仏教では正師に就くというが、「師に三種有り。一には法、二には人。諸仏は法を以て師となし、自然にしかも覺る。自

然に覚るは即ち自証の境界なり」(空海『大日経門開題』)。一つは真理そのものの、その真理をよりどころとして自ら覚る。もう一つは人である。その人は「能く自らの行が具足せば、即ち他を化することは自然なり」(聖徳太子『法華経義疏』)。行が具足した。いわゆる知・行・信を一体化した人である。その人が師である。その師をかこんでの和合衆の中にいることによって、衆に化せられる。道元はその衆を「心を同じくし、威儀を同じくし、互いに非をあげ是をとりて、同じく守道すべきなり」(懷契『正法眼蔵随聞記』五)という。生活をともにした和合衆は悪い点、良い点を互に学んでいく同行、同朋の姿勢である。自己の意志と力によって、状況に、又は客体としての自己に働きかけることによって自己形成を行う。

学習には思想、条件、方法が要件となるが、思想は即ち考えるという行為である。仏教で「人身は得難く、仏法は聞き難し。此の身今生に向いて度せずんば、更に何れの生に向いてか此の身を度せん」(死心悟新『死心悟新語録』)というのは、人と生れることは簡単なことではない。この世で迷いをたつ悟りを得ることに命がけで当り、生きることは簡単らしさを味うことをあげているのである。人身は得難いことを知るのは知的な行為である。外なる道德規範も、他にならうことである。他にならうことは内なるものを開発することなしには有り得ないことである。人間の成熟、内なる自己形成は学習によるものであるといえる。

(大正大学教授)

特別寄稿

法然上人と私

慈顏

梅庭昭寬



元祖さん

昨今「元祖」といえば、観光地の土産物店やラーメン屋さんの看板とか旗印に染めぬかれた宣伝商標としてよく目にする慣用語になってしまいましたが、浄土宗の寺に生まれ育った私にとってこの言葉は、いつも本堂内陣のうす暗い一隅ではほほ笑みを浮かべながら坐っている僧形の姿をした木像の人が、幼少の頃から他ならぬ「元祖さん」なのでした。

あの頃、寺の者がその人を「がんそさん、元祖さん」と呼んでいたことから、その本名が「元祖さん」なのだと思ひこんでいたのでした。

その「元祖さん」と法然上人の名前が一つに結びついたのは小学校に入ってからのことではないかと思ひます。

雪国の御忌

北海道では春まだ遠い雪の降りしきる厳寒の二月二十五日、私の寺では「元祖さん」の像を本尊前に安置して、法然上人の亡くなられた日をしのぶ「御忌」の法要を営むのが昔からの習わしになっておりました。

戸外は氷点下十度を下廻る厳しい寒さではありますが、堂内の元祖法然上人のその御影像のまわりだけは灯明のあかりが暖かげにゆらめいて、ほほ笑みを浮かべたその慈顔を明るく照らしております。寒さにかじかむ両手を合わせながらお念仏を唱えている小僧の頃の自分の目に映るそんな「元祖さん」の顔からは、やがて訪れる春のうららかな陽光が浮んでくるようにも思えるのでした。



雪のなか仏の御名を唱ふれば

つもれる罪ぞやがて消へぬる

数ある法然上人の御詠のなかで、珍しく雪を詠まれた一首です。同じ雪とはいえ、法然上人が目にされた京の都に降る雪とは違い、北国に降り積もる雪は人の背だけをこえ、春三月、四月になるまで雪どけの季節を迎えることはありません。そんな時節に営まれる御忌の法要で、おだやかなほほ笑みを浮かべている「元祖さん」を仰ぎ見ながら唱えるお念仏の一唱一唱は、北国に住む者にとって、春を待ち望む祈りの唱和でもあったのです。

法然上人を読む

生まれ育った北海道西岸の港町・岩内を初めて離れ、エルムの学園と呼ばれていた札幌の北海道大学に入学し、そこで選んだ専攻科は当時古田紹欽先生が主任教授をされていた印度哲学科、通称「印哲」でしたが、その年印哲に進学したのは私一人だけ。今年は誰も来ないのかと思っていたのに、と古田先生から開口一番に言われ、歓迎されているような気がする一方、なんとなく心細い思いでもありました。しかし講義や演習が始まって研究室に通いなれるにつれ、印度哲学研究室といういかめしい看板とはうらはらに、そこが自分にとってなんとも居心地のいい棲み家になるのにそれほど時間はかかりませんでした。

古田先生からは演習で中国・日本の主だった仏典の手ほどきを受けました。学生が大学院生を含め六、七人という小世帯であったことから、演習も年長の先輩と一緒の席で、入りたての新入生にとってはハンデがありすぎたわけですが、楽しみは演習が終ってから団欒でした。演習の机がそのまま酒宴の席になることもありました。古田先生が机の抽

き出しから出してくれたウイスキーや薩摩焼酎などを各自が湯呑茶碗に注いで談論風発が
始まるのでした。冬期間などは研究室に据えつけられた石炭ストーブ（鋳物製の堂々たる
シロモノ）の上であぶったスルメイカが酒の肴になったりしました。パンカラの気風が残
っていた古き良き時代ならではの、おおらかな青春時代の思い出です。

そんな研究室生活が始まって間もない頃、演習のエキストに「選択集」が採り上げられ
ました。「梅庭は浄土宗だからよく知ってるだろう」と古田先生から軽く言われて、ドキ
ツとしたことをいまでも思い出します。「選択集」が法然上人の主著であることは知って
いても、それまで手にしたことは一度もなかったからです。大変なことになった。演習が
始まる迄にひと通り読み終えておかねばならない必要に迫られて、註釈書をかたわらに
「選択集」の頁を夢中で繰り始めました。

細目は理解できるはずありませんでしたが、読み進むにつれて、その論旨の整合性、
文体の格調、そしてなによりも、称名念仏の一行に収斂してゆく法然上人自説の文章にこ
もる氣迫の筆勢は、二十歳になったばかりの初学者の心奥にも響いてあまりあるものが感
じられました。

たとえば第三章「念仏往生の文」の

故に知んぬ、念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。しかれ
ば則ち一切衆生をして平等に往生せしめむがために、難を捨て易を取りて本願とした
まふか………弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて一切を撰せむがために、
造像起塔等の諸行をもつて往生の本願としたまはず、ただ称名念仏の一行をもつてそ
の本願としたまへるなり。

との一文や、結語の「浄土の教、時機を叩きて行運に当れり。念仏の行、水月を感じて昇降を得たり」の一節などは、その語調の響きの良さと相まって、口で誦んずるまでに繰り返し読んだものでした。

後年、池波正太郎さんのエッセイを読んでいたり、モンテーニユの「随想録」が愛読書の一つだった池波さんがその一節を取り出して、「男らしくっていいねえ、モンテーニユは……」と嘆賞しているさまが、そのまま法然上人の文章に接して抱いたあの頃の自分の気持そのもののように思われたのでした。

おだやかに、時間の流れに身をまかせるように推移していた学生生活も最終年度の四年目に入ると、にわかにあわただしいものになってきました。それは昭和三十年代のなかば、日本の高度経済成長がまさにウナリを上げて人々を駆りたてているような時代でした。

他の学部、学科へ進学していた同期の仲間たちも卒業期を迎え、その多くは若き企業戦士として産業社会へ参入する準備に忙しそうでした。そんな仲間たちにひきかえ、『出世間』や『遁世』を語る仏典の余薫がいつの間にか身に染みこんでいたせいでしようか、将来のことは別にして、このまま研究室暮らしを続けたいという思いに引かれるまま、大学院生として留まることを心中ひそかに思い決めておりました。それに先立ってまず仕上げなければならぬのが学部の卒業論文でしたが、そのテーマについてはほとんど迷うことなく法然上人関連の研究分野のなかから「法然上人伝」にテーマを定め、残存する十五種類ほどの法然上人伝を読みすすめるかたわら、これに関連した先学のすくなからぬ著作、論文をおさるおさる手にすることから始めました。

結果は、すでに論文執筆に入る前から惨憺たるものになるであろうことは予感されてお

りました。というのも、浄土宗内の諸碩学の精緻をきわめた研究、また井上光貞、田村圓澄博士の史学、文献学を駆使された各種法然伝の克明な分析を前にして、ただただ圧倒される思いだったからでした。

そんな次第で学術研究としては凡庸きわまりない結果に終わった卒業論文ではありませんが、執筆過程で目を通すことのできたさまざまな文献、史料を通して、自分なりに法然上人という存在に向かうなにかの手応えを感じ取ることができたように思われ、それがせめてもの救いといえれば救いでした。

今現在説法

法然上人についての研究分野としては、その教義および生涯の事跡が二本の柱となるわけですが、初めて法然上人にかかわる論文書いたものを書き始めた頃から私の関心が向いていたのは、法然上人とはどんな人柄、どんな風貌の人だったのだろうかという、いわゆる一人の人間としての法然上人像でした。

もちろん、これを推測できる伝記史料や絵像もかなり残っております。しかしその多くは、承安五年、四十三歳の時点でその立宗宣言から入滅の八十歳に至る、いわば宗祖としての法然上人、田村圓澄先生の指摘によれば、「救済者」としての法然上人、すなわち浄土よりこの穢土へ還相された救済者として描き語られる法然上人像に力点が置かれがちだったといえます。しかし、法然上人の全人像をという観点からするならば、これに先立つ専修念仏帰入に至る間の「求道者」としての法然上人の前半生がきわめて重要視されてくるわけですが、各種の法然伝からその間の事情を窺うのは難しいのが実情といえます。

とりわけ、叡山西塔黒谷から一時下山して嵯峨清涼寺、次いで南都を訪れたとされる法然上人二十四歳の保元元年から専修念仏に帰入される承安五年に至る青年期の二十年間について各種の法然伝はほとんど触れることはありません。

初めて法然上人にかかわる論文めいたものを書いてから三十年ほどが過ぎ、この間関連する何本かの拙稿を発表する機会もありましたが、浅学の悲しさ、いつも念頭にあり続けた法然上人青年期のこの『空白の二十年』の解明は、私にとって未だ五里どころから、百里霧中の道のりのままです。とはいえ、その時点の法然上人を遠望できるような視界の開く一瞬もないわけではありません。

法然上人が一時下山された二十四歳のその年、保元の乱に始まる戦乱は天下を揺るかし、これに連動するかのようには叡山中での闘争の続発、京洛を襲う大火、辻風、そして飢饉。そんな時代の猛威のもとに置かれた人びとの安心立命を道を求め、「然る間、歎き歎き経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖教に向」かった法然上人のその二十年間は、はるか八百年昔の歴史の一コマとして遠ざかってゆく光景ではなく、今日、この不安と不信の時代において再び「今現在説法」されている法然上人の姿をそこに見る思いがするからです。

(帰厚院住職)



いつになく暑かった夏にも別れを告げ、ようやくすこしやさしい季節、実りの秋を迎えました。実りといっても別に味覚に限ったことではありません。大きく実った「愛」を両手いっぱいにかかえて、幸せをかみしめている方々が多いのではないのでしょうか。そう、巷では秋の結婚シーズンを迎え、たくさん新しいご夫婦が誕生しているようです。いまや遅しとその日を待ちわびているカップルもいらつしやるでしょう。でもきつと不安もあることと思います。そんなお二人へお釈迦様はこんなアドバイスをされています。

夫は五つの方法で妻に奉仕しなければならない。「一つ、尊敬する。二つ、軽蔑しない。三

若和尚の

チヨットいいはなし其六

つ、道から外れたことをしない。四つ、権威を与える。五つ、装飾品を与える。」「〔長部經典〕

「シンンガウラへの教え」と。

お經典には「夫が妻に対して」となっています。どうも旦那さんが奥さんを立てているご夫婦のほうがウマクいつている傾向も認められるようですが、お釈迦様の時代もやはりそうだったのでしょうか（？）しかし、けつして夫だけがそうすればいい、というものではないでしょう。旦那さんが奥さんを尊敬する、軽蔑しないといったことはそのまま奥さんにとってもあてはまるはずです。

夫婦が尊敬し合い、軽蔑せずにお互いの人格を認めて権威を与え合う、そんなところに夫婦

としての真の揺るぎない愛情が培われていくのだと思います。

そして忘れてはならないのは、自分が相手から尊敬されるような、軽蔑されないような人間であるよう心掛けることではないでしょうか。自分は好き勝手にやっついながら、相手には尊敬してもらいたいというのは都合がよすぎますものね。これが蔑ろにされてはよい関係、そして愛情は育まれないと言つてよいかもしれません。

小生もはやくそのお釈迦様のアドバイスを実践できる日が来ることを願ひながら、新しい旅立ちを迎える方々へ祝福の盃を傾けましょう。乾杯！（正）

最終回

楽屋ゆかた



— その十二 —

連載

中村助五郎

〔三〕

関 容子

内弟子というのは師匠の家に寝起きさせてもらって芸の修行をするのだが、そういう人は今ほとんどいないらしい。

助五郎のような元内弟子だった人は何人かいて、その苦勞話を聞くと、なるほどこれだけの辛抱ができる若者が今いるだろうか、と思う。でも、置く側もまた大変だろう。他人がいきなり生活の中に入るのだから、私ごとが丸見えになる。

助五郎の内弟子時代の日課を思い返すとこんなふうだった。朝八時ごろ起床。玄關と応接間の掃除をして朝食。稽古ごとに行つて来て師匠の供で楽屋入り。衣裳つけを手伝つたり、小道具や草履を持つてあとを追つたり。その間に自分も出て、帰宅すれば師匠の食事どきに新聞や新しい台本を読んで聞せる。そして師匠が寝つくまで、足もみ……。

「たしかに窮屈でしたけど、それだけ勉強時間が長いわけですから有難かったです。通いの弟子より師匠の目にとまりやすいですから、役もいただきましたし。とにかく若かったですか

ら朝から、晩まで気が抜けなくても平気だったんですね」

助五郎が内弟子として第一に心がけたことは、どんな場合も主人夫婦に信頼されることだった。「でも難しかったのは、師匠と奥様とどちらへ忠義にしたらいいか。その板ばきみになって困ったときでした」

助五郎は、これまで大事に胸にたたんでおいたことを、今、語り始める。

「あれは、師匠が『リチャード三世』に出ていたときですから、昭和三十九年三月の日生劇場でした。ぼくは貴族（つたつて並び大名みたいなものです）と、軍兵（次々に戦況不利を伝えにくる御注進の一人です）の役でした。ある日のこと、楽屋で『仲助（まだぼくは仲助でした、これを届けてくれ）と、師匠がメモのような手紙を差し出したので、ぼくが一瞬暗い顔になつて……、これは奥様（勘三郎夫人）がかねて気にいらつしやる方への連絡だな、と思いましたが。すると師匠はあの通り疳癪持ちですからね、『何だ、その顔は！ 使いがい

昭和50年2月、新横浜劇場、
『勘平の死』劇中劇での勘三郎（左）と助五郎（中）



やなか!』と物凄いです、それでもこれをしては奥様に背くことになる、と思って、かたくなにうつむいていました。『そうか、いいよ、そういうことならわかったよ』と、クルリと向こうを向いてしまったんで、ああ、もうここにはいられないな、と思いましたね」

勘三郎が背中全体で助五郎を拒絶していた。

そのまま劇場の裏口から外へ出て、夜遅くまで町を歩き、安いホテルに泊まって、翌日から無断で休演した（代役は四郎五郎だったという）。二泊して三日目の早朝、着替えを取りにそつと帰った。

「お手伝いさんが知らせたらしく、奥様が寝巻のままあわてて出ていらして、『まあ、お前、どこにいたの？ 今、すぐ起こすから待っててね。ここできつと待ってるのよ』と廊下を引き返していらっしゃる。その後ろ姿にお辞儀をして、今度こそ本式に家出です（笑）」

そのとき、助五郎は、花道で富樫（とがし）に一礼する弁慶のような気分を味わっていたかもしれない。根っから芝居好きの役者だから、どんなときで



内弟子となった助五郎は四六時中稽古だった。(左端が助五郎)

もきつと芝居がかってしまうだろう。

そして助五郎は故郷の鳥取へ帰った。そのころ父親はもう亡くなっていたが母親は健在だった。息子の突然の帰郷をいぶかってあれこれ訊ねるが、助五郎はあいまいな返事ばかりしていた。

やがて暑い夏の盛りに、東京から使者が来る。当時マネージャーだった坂崎さんに、多くを語らず、一通の手紙を手渡すと、じきに帰って行った。

「師匠からのお手紙でした。手紙と言ってもちゃんとした封筒じゃなく、上等なちり紙に眉を描く筆で走り書きしたのを、もう一枚のちり

紙でくるんでセロテープで止めてある、といったふうなもので、いかにも師匠らしい、情のこもったお手紙でした」

助五郎は師匠の手紙を開いた途端、あ、眉筆だ、と思い、その楽屋の匂いに強く心を動かされたに違いない。

三十年以上も大切にしまっていたその手紙を、助五郎は見せてくれた。ちり紙とは言っても、上質で手ざわりのよい繊維入りの化粧紙だった。ひろげてひと目見ただけで、中村屋が悔いている感じが文面から伝わってくる。それは用紙の下半分に、いかにもコソコソと書かれていた。一行一行の頭を揃えず、だらだらと左へ下がって行ってまた上る。まったく体裁を整えない書き方が、去って行った弟子を案じる勘三郎の真情をそのまま現わしているようだ。

その手紙を読む。

へもう怒っていないのだから、とにかく秋にあつて下さい。私がわるかったのだから、心配で心配でならぬから、久枝には私が云ふから安心して下さい。仲助へ



内弟子だった助五郎は師匠(左)の舞台上に上がることが多かった。

久枝というのは勘三郎夫人の名。宛名の「仲助へ」の文字がひどく大きくて、師匠が弟子に呼びかけているようにも見え、本文を遠山の景色に見立てれば、宛書きは仲天にかかる月のようにも見える。下に差出人の署名はなかった。私は中村屋のサイン以外の文字を初めて見たが、柔らかみのあるいい字だと思った。その手紙を中に置いて、元内弟子と私とは、ずいぶん長い間黙っていた。

「秋に師匠の家に帰りました。夜遅く芝居がはねてお帰りになったときに、『お疲れさまでした』と昨日の続きのように頭を下げると、師

匠も『ああ』と何ごともなかったようにうなずいて、それっきりでした。ただあくる朝、『今度の旅(仙台)では、いつもの役はお前じやなく、四郎五郎に決めちゃったよ』とおつしやいました。いつもの役って、『大蔵卿』の勘解由おくらぎょうの役です。四郎五郎さんはちよつと先輩なんです。すがほくは内弟子のせいで品賃ひいきしてもらって、旅だとそんな大役をいただいていたんです」

ところで、中村屋が亡くなって当主が若い勘九郎になり、いろいろ難しい問題もあるだろう。一門には若旦那よりも年上という役者がかなりいて、みんな勘九郎のわんぱく時代を知っている。

たとえば昭和三十六年、明治座で中村屋が『無法松の一生』に出たとき、勘九郎は六つだった。助五郎の仲助は、揚幕で出を待っている師匠のところへ、吉岡の坊ちゃん役の勘九郎を毎日送り届ける。ところがいたずらざかりの勘九郎は、すぐにどこかへ姿をかくして仲助を困らせた。とにかく花道の下の奈落には動物の貼りボテがあるやら黒幕のさがったところがある

やら、かくれる場所に事欠かない。あ、あそこだな、とすぐにわかつてこそは役者。わざとあわてたふりをする、勘九郎がキヤッキヤッと大喜びをする。ある日あんまりサーブミスが過ぎて、危うく出トチリになるところで、中村屋から大目玉をくったことがあるという。

「しかし昔は昔、今は今ですからね。立派になった若旦那に門弟として仕えることは当たり前前と思っています。でも、よそのうちでこんなことがあったようです。大旦那亡きあとの若旦那の地位がだんだん上ると、それまでもらえた脇の重い役も、よそのかなり上の役者さんがつとめるようになりますね。それを若旦那に向かって談判に及んで、引っこみがつかずに役者やめちゃった人がいるんです。気持ちにはわかってますが、どうもねえ」

しかし、ある年齢に達したお弟子の中には、同じ身上（しんじょう）（給金）なら、台詞を憶えたり遅くまで出演したり、余計な神経や労力を使いたくない、と考える人もいるらしい。それでも役がつけば大張り切りするようだから、普段はそう

言って不満をまぎらしているのかもしれないが。

「役で出れば余分なお金もかかるんですよ。合引（あひり）（舞台用の腰かけ）を出してもらったり、『夏祭（なつまつり）』の儀平次（ぎへいじ）なんかだとあとでザンバラになるんで髪（かみ）に仕掛けがあったり、泥の着物を洗ってもらったりしますんで、別にお礼（ごれい）（御祝儀）をしなくちゃなりません。それでも役者である以上、ぼくは役がしたい。このことを若旦那にどうわかってもらおうか、とさきさん考えましてね」

勘九郎の楽屋をのぞくと、いつも来客があったり書き抜きを読んでいたりでなかなか切り出す折がない。

「そうだ、手紙……と思いました。やっぱり師匠からいただいた手紙のせいでしょうか。そこでサラッと用件だけ『どんなに大変でも役をさせてください』と書いて、お帰りのときに渡しました。あくる日若旦那が『あ、わかったからね』とにつこりしてくだすって、何だかほっとしましたね」

（エッセイスト）

連載

谷地興文◆

外国で
生活して
③

托鉢と瞑想の日々で
私が見たもの
（海外生活から
日本が見えた）



THAILAND

仏歴二五三三年、一九九一年の十二月から約三カ月間、私はタイで「修行僧」としての生活を送った。現在ハワイのお寺で「開教使」として暮らす以前、横浜のお寺で五年間、僧侶、いわゆる「お坊さん」の生活を送った。さらに遡ると大学を卒業するまでの二十一年間は田舎のお寺の「小僧」であった。このように私の人生は、小僧からお坊さん、修行僧、そして開教使と実に様々なスタイルで生きてきたことになる。岩手の田舎から東京の大学、横浜からタイへ渡り、ついにハワイまで来てしまった。ただ一つ変わらなかったのはどこへ行っても必ずそこにお寺があったということであろう。仏像と信者の間にいつも私があった。そんな感じである。私は自分のことを「僧」とであると信じている。ただ呼ばれ方が違ふと随分と別の人間のように思われるものだ。修行僧、開教使（海外布教師）、お坊さん、小僧と一般の人々にはかなり違うもののように思われているようだ。

何度か海外旅行にも出かけたが、実に沢山の人の手を煩わせて今日の私がある。私のこれら海外生活体験の中から特にタイの僧院生活を通して、日本と比べた生活の違い、宗教の違いなどを私なりに書き留めてみたい。

ご承知のように、お釈迦様の教えはインドから大陸を越えて海を渡り、日本へと伝わった。私がタイへ旅立とうと思ったきっかけは、その教えの源を探索してみたい、生きたお釈迦様の教えに触れてみたいと思ったからである。しかし実際はもっと単純な事であったのだ。ある時、横浜のお寺にタイ人僧六名が旅の途中立ち寄っていた。彼らは黄色やオレンジ色の衣を高く身に付け、いつでもゆとりとした動作で優しい言葉で話していた。私は彼らの礼拝や読経を初めて見た時、まさに本物（日本のそれが偽物という意味ではないが。）の「祈り」を垣間みたような気がして、思わず手を合わせてしまう感激を覚えた。昔から好奇心の強かった私は、その中の一人が

多少英語が話せるというので、お茶を出すついでに思い切って話し掛けてみた。「貴方はあんな風に座って読経し、足が痛くなることは？」と。彼は笑いながら「足は痛いし修行も大変ですよ。」と答えた。私は何か嬉しくなって「僕でもできるかな？」と聞いたところ「もちろん君でもできるよ、タイに来なさい。」と。その日から雲上人のように思っていた彼らに、急に親近感を覚えるようになったのである。

今だから言えることではあるが、以前の私は、どうしても外国人に対して何か自分よりも優れているような、逆に日本人である私を卑下しているようなところがあった。世界に飛び出たとき英語を話せないのは日本人だけで、他の人達は皆英語で流暢に話している。彼らが日本人を見る時、何か、特別変わったものを扱うような目で煙たがるのである。しかし、本当は皆同じ人間なのだということが、気がついたのだ。たとえ肌の色が違ってても、



金髪であっても、同じように泣き笑い、短気なものもあればのんきなものもいるし、正義感の強い人もいれば悪さばかりしている人もいるんだということ。その頃は、すっかり外国人との挨拶で引け目を感じることは無くなった。

さて、タイ行きの希望に心踊らせていた頃から、もう私は何でもやろうとしていた。おそらく目の前にあるものには何でも飛びついたであろう。タイのお寺に片言の英語で手紙を出したところ、後日、タイ語と英語両方で、私の身元引き受けを認める書が届いた。タイ国大使館で快くビザ（入国許可証）をくれて「頑張つて。」と励ましてくれた。その日から私は、東京、横浜中の本屋を走り回り、タイに関する書物を買ひ漁っていた。本だけではない、生活に必要なと思われる薬や電気製品なども買い揃えた。日本のように便利な国に長く住んでいると、全てが日本製でないと満足しなくなってくる。確かに日本製は優れて

いる。しかし、アメリカでも、東南アジアでも現に何万何千という人間が暮らしているのだから、日本製にこだわる必要はなかったのである。むしろその国に住めば住むほど、その国の物で、現地の人と同じように暮らしたいと思うものである。結局、私の持参した荷物の半分近くは珍しい日本製品として、仲間やお世話になった人達に配られたのであった。

外国に到着したときいつも思う事、まず空気が違う。星空は同じなのに、あの噓せるような空気が異国であることをこの身体に教えてくれる。タイに着いたとき、真夜中の空港に黄色の衣が一際目立ち、その僧が迎えの人だとすぐに気が付いた。薄暗いお寺に到着して、私は部屋に案内された。板張りトイレと水だけのシャワーが付いていた。その夜、不思議にゴザ一枚で安らかに眠ることができた。余談ではあるが、その頃の私は横浜のお寺で寮生活をしていたので、貧しさと不自由には慣れていた。横浜での初めての夜は今で

も忘れない。四畳半の湿った部屋に汚い布団が一枚。銭湯も初めてだったし、頭髮もきれいに丸めて、真夜中に男泣きに泣いたことを。タイにいる私は悲しむよりむしろ子供のように胸を躍らせていた。私の目的は南方テラワ―ダ仏教を身体で体験することであつたが、そのためにはまず友達を作ることが手取り早い。明くる日から二、三人の友達ができた。友達は日本のことを知りがつたし、私はタイのことを質問した。私は小さなタイ語の辞典を常に携帯するようになり、初めて聞く言葉は空欄にどんどん書き込むようになった。また、その寺で私は初日から三百人もの黄衣の集団と行動を共にした。辛かつたのは、私一人が紺色の日本人僧ルックで、他の三百人の最後尾を付いて廻ることだった。私は得度式（僧になる式）に備え、パーリ語の経文と式の動作を覚えるのに必死であつた。十八日後、私は持参した安全剃刀で、髪と眉毛までも剃り落とした。得度式は三師と二十名の僧の賛

同によつて執り行われた。私は二二七箇条の戒律と三枚の衣、一つの鉢を授かつた。「エツタラナー」と命名された。僧になつたのだ。

儀式の後の生活は、お経の暗記、タイ語の勉強、戒律を習い、瞑想をする日々であつた。先輩僧の話を知ったり、お互いに罪と懺悔し合う日々を過ごした。

タイ人僧には色々な境遇の人がいた。貧しさのあまり子供の頃にお寺に預けられたもの。彼らはいわゆる一生涯僧でいるタイプの人。しかし殆どの僧は一定期間修行を積み、社会へ戻つて行く人達だった。私はどちらかというと前者のようにお寺で生まれ、ずっとお寺で生活してきた。私には彼らに似た誇りがあったし、仏の教えを習得しようとする意気込みは誰にも負けたくなかつた。

一月もした頃、私はバンコクを離れ郊外へ来ていた。水道や舗装道路の無い生活には正直驚いた。結局私は三カ月で六カ所の村のお

寺を旅することができたのだが、どんな貧しい村でもタイ人の生活の一部としてお寺があった。どこへ行っても毎朝四時から礼拝、日の出と共に托鉢に出掛け、食事は午前中に二度だけ、その後瞑想、お経の暗記、さらに私には、他に言葉の勉強も残されていた。それでも一日は全体にのんびりとしていて、走ることも、汗を流すことも戒律によって禁じられていたので、身体に疲れは感じなかった。托鉢のため、私の足の裏はフランスパンのように硬くなり、日焼けと毎日のダイエット生活で外見に凄みを増してきていた。雨水で洗面、洗濯、沸かして飲用し、入浴は河で済ませた。荷物は換えの衣一枚とカメラと日記だけ、柱四本に屋根さえあればどこでも寝ることができた。お金も使わないし、食べ物にも困らない。ときどき道行く人が水やペプシコーラを布施してくれる。思うに僧と乞食は紙一重なのだ。ただ僧は他人の支えとなり、他人に愛されるものである。そんな僧とし



てのゆったりとした時の流れの中で、私はまるでお釈迦様の時代にいるような錯覚すら覚えはじめていた。

タイで十年、二十年と修行を積んだ僧は、

会ったその場で違いが分かる。私はある長老僧にタイ仏教の極意を伺った。彼は人差し指を顔の前で左右に振りながら、「チヨイーイ！（気にしない気にしない）」と言った。

「たどえ悩んだり、難しい境遇に出会った時でも人差し指をずっと立てて顔の前で左右に振りながらチヨイーイって言うんだ。諦めないぞ。気にかけないよってね。」私は彼のことを決して忘れないだろう。僧は修行を積んで人々の手の届かない処に上り詰めるのではない。修行を積み、人々の下で支えてあげる事が必要なのである。タイへ行ったなら目に付くだろう、修行を積んだ僧の廻りにはいつも人々が群がっている事を。

こうした様々な人との出会いの中で、多くを学ぶことができた。特に、日本人の立場か

らだけ物事を判断することが非常に危険であるということ。つい日本人は何でも完璧でいようとしたり、お金を掛けてなんでも直そうとする。日本だったらもつと……と。そうではない。貧しいからこそ助け合い、苦しいからこそ優しくなれる。私が出会った住民の笑顔に勝てる笑顔は、今の日本にはおそらく見られないであろう。人々の笑顔と優しさが、外国人の私をいつも支えてくれたのである。

私は現在、ハワイ浄土宗別院に、開教使として妻子と共にお世話になっている。タイでは素晴らしい体験をさせてもらった。しかし今は体験ではなく生活しているのである。ハワイには沢山の日系人や移民がいるが、彼らの多くは日本と日本人であることを捨て、言葉や文化の障害を乗り越えようと必死で暮らしている。

外国で生活すること。一口に言っても一人一人実に多様である。国籍を取得するのかどうか、それとも日本国籍で永住するのか、そ



れとも非移民なのか。私の子供はアメリカ国籍と日本国籍の両方を成人するまで持ち合わせるのである。私は日本という国が大好きだ。今までどれだけ多くの人に日本のことを自慢してきたことか。特に日本の仏教は素晴らしい。それは日本のお寺が素晴らしいというのではなく、我々日本人が幼い頃から学校や家庭で、テレビや本で教えられていたものが仏教なのである。人を思いやり、悪いこと、やってはいけないことの判断ができる。そんな国は世界でも数えるくらいしかない。ただ最近の日本は加熱しすぎて、何でも度が過ぎているのが様々な問題を生んでいるように思える。

タイでの修行を終えた時、心から思ったこと。それはお釈迦様の「中道」という教えである。私の釈迦は決して正しいとは思わないが、中道つまり何でも程度良く生きられたなら幸せだろうなど。お酒やお魚を口にすると、きでも自然や生命観をほんとうに理解したな

らば、このうえない幸せを感じとることができ
るであろう。何でもほどほど。これが一番
難しいから、タイではどんな小さな罪も許さ
ず、禁欲の修行を続けるのである。大げさに
言って、もしも人間の完成というものがある
ならば、何にもとらわれることなく自分自身
で正しい判断をしながら、人生を生きてゆけ
ることであろう。日本に住む日本人に一つ言
いたいのは、日本ほど自由に生きられるところ
はない。ただ、日本ほど各個人の責任に任
せられている国はない。つまり、あの豊かな
国を生かすも殺すも、他の誰でもない一人一
人なのだというのを。日本は本当に素晴らしい
国になる可能性を持っているのだ。

私の拙い経験を通して、海外生活と、海外
から見た日本の印象を書き留めた。私と同じ
ような思いの人がいたなら、是非、タイへ行
ってほしいと思う。でき得る限りのお手伝い
させていただく所存である。「君でもできる
よ。」これが、今の私を変えた言葉だったから。

プロフィール



谷地興文

やちこうぶん



ハワイ浄土宗ホノルル別院駐在

1966年、岩手県 花巻市、廣隆寺にて二男として生まれる。

独協大学経済学部卒後、横浜大光院にて修業、少僧都養成講座課程修了

1991年タイ国バクナム寺院にて得度の経験をもつ

趣味・パソコン

先日高校の先輩と会い、思い出話をした。

宗門校である我々の高校は、増上寺の御忌会の時には、中学生は必ず増上寺にお参りして、御法主台下の話を聞くことが恒例であった。

もう三十数年前、御法主は椎尾弁匡台下であったと思われるが、先輩は台下のお話を今でも鮮烈に覚えているとのことであった。

それは、台下が一枚の真っ白な紙の真ん中に、一点黒く塗りつぶした紙を持って、「諸君たち、これは何に見えるか」

と、聞いたそうだ。生徒たちは一様に、「黒のマルです」

と、答えたそうだ。

そこで台下は、もう一度、

「他のものに、見える者はいないのか」

と、生徒たちをにらんだ。

生徒たちは、

「御上人、それは黒いマル以外には見えません」

と、誰もが言い返した。

そこで台下は言われたそうだ。

「お前たち、どうしても黒いマルにした目が行かないんだ。黒いマルはこれっぽっちしかない小さなものじゃないか、この黒のマル以外の白の部分の方が、こんなにたくさんあるじゃないか。どうして、この白い方に目が行かないんだ」

こう言われて、生徒たちはびくりして、気がついたそうだ。

◆◆◆ 椎尾台下の思い出 ◆◆◆

そして台下はゆっくり言われたそうだ。

「人間汚いもの、相手の汚点や失敗、そんなものにはかりに目が行くようではだめだよ、一つのものにも、いろんな見方が、必ずあることを覚えておいて下さいね。」

この話は、その後の先輩にとつて、とても大きな教訓として今でも残っているとのことであった。先輩はしみじみと、

「私は普通のサラリーマンの家に育ち、貿易会社勤め、宗教とは無縁な生活をしているけれど、浄土宗の中学、高校に通い、松本徳明先生の話を、増上等での御法主のお話などの体験が、私の思想のベースとなっているんだねえ」(潤)

表紙は語る
共に生きる
ブナ原生林から

●
本誌表紙写真／文
御所野洋幸

森は水を貯え、土壌を作る。

地球温暖化の原因になっている二酸化炭素を吸収し、鳥獣を育て、プランクトンや虫の育成まで行ない、結果的には魚類も保護している。

その森の働きの要、それがブナの原生林なのだ。

樹齢150年のブナ1本で、約8トンの水を貯え、ヘクタールあたり年間10トン近い葉を落とすという。

雨が地表を走ることを抑さえて洪水を防ぐブナ。果実は鳥獣を養い、落葉は土を肥やし、山菜や他の野草を育てるブナ。森の母、森の医者と呼ばれるブナ。そのブナと共に生き、写真を撮り続けるひとりの写真家がいる。



平成三年九月二十八日、台風十九号のニュースがテレビに出る、山の撮影準備をしてるときだ。気象庁の予報では大型の台風で各地に被害を出すおそれがあるので十分に注意をするようにと何度も繰り返している。天気図では日本列島を縦断し私の撮影予定地を通るようだ。台風の去った翌日役場に電話を入れてみた。神社の大杉が倒れ民家の屋根が飛ばされたり又毀れてしまった家もあり、列車や主要道路にも被害が出ているので山の情報もまだわからないと云う。実家の方は幸にも被害がないがあちこち大変だよと義姉の声も緊張感で普段とは違うひびきた。

台風から一週間が過ぎ例年なら山の紅葉の初まる時季になった。それまで何度となく役場や山の知人に電話を入れてみたが、そのつど情報はよくない、山を熟知している営林署の職員が二人迷った。それほど山の様子は変わっている。十月撮影予定のブナは大丈夫だろうか心配だ。キャンプ場までの道路が整理さ

れたとの連絡を受け、山に入ることにした。

十月十三日、雨。山は茶色になって景色がすっかり変っている。林の中はまるで妖怪が森を踏み荒したかの様だ。登山道に入るとすぐに直径一メートル近い大木が倒れている、回り道をして道路に出ようとしても又倒木がある。撮影予定の木にたどりつけない。大型の台風は風の被害だけではなく海の潮を巻き込んで草木を茶色に枯らす塩害も大きい。

ブナは葉のつけ根の方が緑のままで葉先は茶色になっている。それが強い雨でびしょ濡れて下に垂れ下がり悲しそうに見える。

夢中で歩いた。

倒れている。撮影予定のブナが、今年の秋の主役の木が倒れている。隣のナラの木に上の方を引っかけ45度ぐらいいにかたむいている。姿、形も美しいあのブナがどうして……。枝をかきわけ乗り越え幹に手をふれ、どうしてこんな姿になったんだと声を張り上げた。雨の中に呆然と立ちつくす。残っているブナも



カエデもナラの木も塩害で葉は茶色になり美しい紅葉とはほど遠い感じになっている。私の中の何かが切れ頭の中が空白になった。雨と汗と涙でぐしょ濡れの顔のまま枝を分け乗り越え、ただ歩き廻る。迷ってしまった。北も南もわからない見たこともない景色が広がっている。倒れている木を迂回すると又倒木だ。雨は相変わらず叩きつけるように降っている。五時間も歩いている。山の斜面に向って右に左にと移動したら沢の音が入ってきた。回りは薄暗くなっている。雨で増水している沢を下りどうやら見覚えのある所に出た。

十月十四日、風雨強く撮影可能、地図をみて撮影場所変更を決め休養。

十月十五日、太陽は朝から顔をみせている。ブナの上の方と回りの枝先はほとんど茶色になっているが下の方や木の陰の部分は黄金そのままのものもある。気を取りなおして山合に入って見た。二日前は強い雨で視界もきかず倒木をよけて歩くだけでせいといっぱいな



がら回りを見ると、大変な被害であることは事実だが、林の中は紅葉の美しさがぼつぼつと残っている。小さい野ウサギが目前を横切る。蛇が枯葉の上で体を乾かしている。古い倒木にムキタケが出ている。夕食用に採った。私の心が和んで来た。このあたりは二次林の若いブナたちだ。ブナの黄色とカエデの赤のバランスの良い所に出合った。

自然は時々恐ろしい顔を見せる。しかし山の生物はそれを乗り越え毎年同じ営みをくりかえす。ブナは樹木の中で一番早く朽ちると云われている。倒れて四年目になると樹皮の割れ目に透明感のある木クラグがあちこちに始まる。それはブナが最後の涙を全身から絞り出している様に私には見える。しかしその倒木のそばからは必ず若いブナが元気にのびている。気持ちよさそうに暮らしている時に若いブナが私を元気づけてくれる。

十夜法要縁起

大室了皓

一、十夜法要に詣でる祐崇上人

洛東の真如堂、すなわち京都東山神樂ヶ丘の真正極楽寺のお堂から、美しい節で唱えられるお経の声が聞こえてくる。近寄って行くとお念仏になったようだ。

今まで聞いたことのない節だ。打ち寄せる波のような響きがあるではないか。

実はいま十夜法要が厳修されているのであった。

この法要では、引声阿弥陀経があげられ、引声念仏が唱えられると、かねがね伝え聞いていたとおりだ。

供を連れて、一人の僧がお堂に入って行った。この近くでは見慣れぬ顔であるが、どことなく侵し難い気品を感じさせる。

誰あろう、知る人ぞ知る関東大本山鎌倉光明寺の第八世崇上人であった。

二、真如堂

そもそも真如堂といえは、その昔、証賢という名僧が、阿弥陀仏の日である十五日の前夜に此処でお籠りをした時、夢うつつに若い修行者と老僧が現われて行った念仏の法門を聞いたという所だ。

証賢はそれを流麗な筆に著し、有名な帰命本願鈔三巻を撰述している。この書は念仏の教えの肝要が述べられているものとして、今も浄土宗では大切にされている。

● 帰命本願鈔三巻、西要鈔二巻、父子相迎二巻は何れも証賢作。この三部をもつて『三部仮名鈔』という。

三、引声念仏と引声阿弥陀経

そのような霊跡でもあるだけに、高く低く唱える念仏もことさらに響いてくる。

この引声念仏と引声阿弥陀経は、宗相法然上人が八十才で臨終になられた時に「慈覚大師の九条の袈裟をかけ……ねぶるがごとくして息たえたまひぬ」

と勅修御伝に記されているところの慈覚大師円仁が仁明天皇の勅命で中国に渡り、五台山竹林寺の法道和尚より伝えられた妙曲の仏教の声楽の一つなのである。

あまりにも素晴らしいものであったので、比叡山の常行三昧堂での法要に取り入れられるようになった。

四、慈覚大師円仁との縁

円仁は後に比叡山延暦寺第三世の座主になった名僧だが、中国にあること約十年、各地を巡拝して、日々のかたを書き留めた「入唐求法巡礼行記」は、マルコポーロの東方見聞録より遡ること四百六十年前の作である。

しかもマルコポーロは帰国後、四年も経ってから獄中で、それも同囚に口述してできたものが彼の見聞録だが、円仁の入唐求法巡礼行記は日記であるだけに、当時の唐の様々の事については、見聞録などとは比較にならないほど正確に書かれている。

余談になるが、十数年前に在日していた駐日アメリカ大使のライシャワー氏(故人)は、この円仁の研究家である。京都大学の卒業論文は「円仁の研究」であり、また入唐求法巡礼行記を英訳したことも良く知られている。

彼は生前、中国を旅行し円仁の巡礼の後をも訪れたが、今も遺る数々の経典、遺跡などが円仁の記録通りであるものが少なくないことに驚いた(NHKテレビ放送)。

さて真如堂の本尊阿弥陀如来の胎内仏は、慈覚大師円仁が唐より帰国の船中で奇瑞感得された如来像であることから、大師と真如

堂との縁は浅くはない。

大師が唐から伝えられた引声阿弥陀経、引声念仏が、ここで修されるようになったのは、そのような縁があったからであろう。

年と共に、このご本尊は靈驗あらたかな仏様として都の人々がこぞって参詣するようになった。

五、平貞国と十夜法要

室町時代も半ばを過ぎたころ、將軍足利義教の執権平貞経の子貞国(弟ともいう)は、若い時から浄土の教えに帰依して念仏に励んでいたが、家督相続に当って骨肉争う悲運に見舞われ、煩わしい俗世を厭い出家を思い立ったが、最後の決心を固めるために、この真如堂に入り三日三夜の参籠をした。

満願の夜となった。明けたらいいよ髪を切ろうと一心に念仏を唱えているうちに、何

時しか真夜中も過ぎ朦朧となった時、僧が現れ

「汝が現当二世ともに、我を頼む心に偽りなし、善哉善哉、来世のことはただ我が誓願にまかせ、現世のことは今よりなお三日の後を待つがよい」と告げ

心だに たてし 誓ひにかないなば

よのいとなみは とにもかくにも

と詠んで消えた。

阿弥陀如来のお告げか、と有り難さに感激した彼は、参籠を僧の言葉に従って、あと三日延ばしてから髪をおろそうとした。

ところが不思議にも、その翌日、父貞経（兄ともいう）は上意をもって吉野へ隠居を命じられ、貞国は家督相続を許されて、伊勢守に任官することが出来たる

相続争いは田満に解決したのである。

彼は全て阿弥陀如来のご加護によるものと、

更に七日七夜の参籠をして感謝の真心を捧げた。

將軍義教はこの奇瑞を聞き、たまたま十月のことであつたので、十五日の阿弥陀如来の日に合わせて、十月六日から十五日までの十日十夜、慈覚大師伝来の引声阿弥陀経・引声念仏を法式の中に定めて、十夜法要を行うことを命じたという。

これが真如堂十日十夜法要の起源であると伝えられている。

なお貞国はますます念仏に精進すると共に家も栄え、その子良真是清浄華院第十九世、さらに黒谷金戒光明寺十五世となっている。

さて、初めに登場した祐崇が真如堂に詣つたのには、もう一つ理由があつた。

ここの十夜法要とゆかりの深い伊勢守平貞国の子孫貞永の三男が、実は祐崇の先々代、鎌倉光明寺第六世良咩上人という因縁があつ

たからである。

六、祐崇上人、宮中にて十夜法要を勤める

この後、祐崇は真如堂の僧を率いて、紫宸殿にて引声阿弥陀経・引声念仏を唱える十夜法要の導師を、後土御門天皇の勅命によって勤めることになった。

天皇には去る年、祐崇を宮中にお召しになり、阿弥陀経の講説を聴聞されておられるが、つとに浄土の教えを信じて

誓いありと 思い得る身になす罪の

おもきもいかで 弥陀はもらさん

一すじに たのむ心の道しあらば

二つの河は なみかくるとも

などの御製を残しておられるが、祐崇とは前々から縁があったのである。

七、鎌倉光明寺に始まる十夜法要

紫宸殿のこの十夜法要に天皇はことのほか感激され、何か望みは、と仰せられた。

これに対して、祐崇は関東の光明寺においてもこの様な十夜法要を勤めたき旨を願ひ上げたところ、快く勅旨をもってお許しになった。

これが鎌倉光明寺十夜法要のおこりであつて、それが時と共に他の浄土宗寺院においても広く勤められるようになった。

無量寿経卷下に

「この世において善を修すること、十日十夜すれば、他方の諸仏の国土において、善をなすこと千歳するに勝れり。ゆえはいかに。他方の仏国、善をなす者多く、悪をなす者少なく、福德自然にして、造悪自然にして、造悪の地なければなり。ただ、この世間のみ悪多

く、福德自然なることあることなし」

と、説かれていることに、この法要の教義的な根拠があったことが、広く行われる大きな要因となつたのであらう。

八、庶民が待ち望んだ「お十夜」

寺に参籠することは、俗縁を絶つて心身を淨める修行であつた。そして淨らかなになつて仏と相い対し、宗教音楽にこの世の極樂を感じつつ念仏に励み、現当二世の幸せを祈つたのである。

十月は神無月だ。国中の神々が出雲に集まるので、土地の神は留守になり、祈るのは仏しかおられない月である。

また旧暦の十月十五日（今年は新暦では十二月七日）はその年の労働の結晶である秋の収穫が終わって一息ついた、初冬の、一年は最も良い時期である。

人々は必ずしも十日十夜を寺に籠りくりてはなかつたようだ。秋の稔りに感謝しつつ、稔りの物を仏に供え、来たるべき厳しい冬を仏に守って頂いて無事に過ごし、より幸せな年を迎えたいという願いもあつたらう。

レクレーションもろくに無かつた頃だ。信仰もさることながら、互いに持ち寄つた飲み物や煮物を食べながら、苦勞話に互いを慰め合い、楽しい語らいもしたであらう。縁談などもまとまつたかも知れない。

人々は、伝統あるこのお十夜を待ち望んでいたに違いない。

今は半日のところが多いが、昔のようにお経や念仏に親しみ、心を和ませような、その日の来るのを楽しみに待っていてもらえるような「お十夜法要」ができたらと、頭を悩ますのである。

（光取寺住職）

新宗教と現代社会

オウムの危険信号を どう受け止めるのか

後編

大正大学非常勤講師・東京竜泉寺住職
浄土宗総合研究所研究員

武田道生

平成七年七月一日

法然上人讃仰会 定例総会 講演会より

いま
“家”を
作りなおせ

人間関係とは煩わしいだけ！

今の社会状況では人間を育てにくい。本当の意味での友達など出来るわけがありません。友達は競争相手ですから、悩みなんか話したらずぐに他の人に伝わって落としめられる。いま小中高の先生の悩みは、子供たちがクラブ活動に入らないということだそうです。生徒会活動といったものもやりたがらない。人間関係がとても深くなり、自分がしなくてはならないという活動は敬遠されるんです。淡泊になっていくんです。人間関係を拒否している。そうならざるを得ないようになっていくんです。みんな競争相手だから。

大学生のかつての遊び場は雀荘でした。いまほどの大学の周囲を見ても雀荘だらけ、というところはほとんどありません。多いのは何かというとゲームセンターです。ゲームというのはい人一人の遊びです。友達とはやらない。二人でやるものもありますが互いに画

面を見るだけなんです。麻雀はなぜやらないかという、まず時間がかかるということ。遊びながら話もしなくてはならない。人間関係の機微が煩わしいんです。人間関係を断ち切る時代になって来ているんです。

でも彼らが本当にそう思っているかと言えば、決してそうではないだろうと私は考えています。現実には友達がいない、腹を割った話し相手がいらないという悩みは多くある。本当の自分をわかってくれる人がいない。これが一時期流行った自己啓発セミナーとか、新しい自分の発見をする宗教に人が集まった理由です。自分に自信を持たせる。自分の潜在的な能力を開発させる。電話帳を一気に破ったり、「破裂しない破裂しない」と思っているれば割り箸で風船を指して穴をあけても破裂しないとか。意識を強化することで自分に自信をもたせるのです。

光の戦士とハルマゲドン

かつて『ムー』という雑誌が創刊されたときにオウム神仙の会というのを作った麻原彰晃が最初に紹介されましたが、日本でも超能力を持った人が出たと言われ、そして彼の空中浮揚の写真が載っていました。

また投書欄には光の戦士というコーナーがありました。どういう投書かと言いますと「私は獅子座の何番星から来た光の戦士です。地球に転生してきました。私と同じようにこの地球に転生してきている方ご連絡下さい」という投書です。こういう人たちのグループができた。俗にこれを光の戦士ブームといいました。親でも子でもない、友達でもない、その絆は宇宙意識なんです。今ここにいる自分は本当の自分ではない。魂が本物。その魂は親とかそういう身近なところからではなく、もっと遙か彼方から来ているんだ、ということです。これは当時SF小説などが流行った

中で、子供たちの中にこうした発想が芽生え始めたからなんです。

この光の戦士という言葉は幸福の科学に取り入れられて、信者のことを光の戦士と呼んでいます。伝統仏教が持っていた先祖とか人間のつながり、親子といった人間の濃密なつながり、その中で私たちが存在するという觀念が取り払われ、拒否されたわけです。人と結びついていておかげさまではないんです。

永遠の生命の中で生き続けている一つの命なんです。幸福の科学しかり、オウム真理教しかり、阿含宗しかり。みな輪廻転生を説いています。そして守護神、守護霊といったものによって自分の魂は護られていると説くわけです。守護神、守護霊、靈魂の不滅の転生する命の中で、今、ここに私がいる、そういう信仰なんです。

そしてもうひとつの特徴はハルマゲドンを乗り越えたあとの理想社会の実現を謳う終末宗教なんです。その終末は何によって救われ

るか、超能力者や宇宙人などの特別な存在によって救われるというんです。現在の悪のカルマや汚れた地球人の意識はもうだめだというんです。宇宙的な意識が救ってくれるとまで言うんです。

アメリカでも全く同じです。1975年アメリカ『アクエリアス革命』という本が出て、ベストセラーになりました。一種の占星術ですが、地球は水瓶座の時代にはいったというのです。二千五百年周期で変わるんですが、精神の時代、宗教の時代だったこれまでの魚座の時代には釈尊、キリスト、ムハンマド（マホメット）などの宗教者が出現してあらゆる宗教が生まれました。これからくる水瓶座の時代は破壊の時代、あらゆるものが破壊される時代という。つまり宇宙が破壊される、ハルマゲドンの時代に入ったということなのです。これは若者の間に社会不信・人間不信の絶望感がひろまったあらわれ、といえると思います。

若者に自信を持たせたオウム

破壊の時代などと言えば、まさにオウム真理教のシヴァ神信仰の破壊の考え方、破壊と創造と言っていますが、破壊があつて創造があるという考え方なんです。彼らがシヴァ大神という神を主神としている意味というのは、すごく直感的に時代を読み取っているんです。若い人を中心とした意識の変化を。人間の意識の個人化が進み、バラバラになって、言わば不信の時代になったと言えます。人が信じられなくなった時代。自分のことしか考えない、同時にそれは自分自身にも当てはまることなのです。本当の自分が見つからない、わからない、そういう意味での不安と不信なんです。でも本当は自分自身はすごい可能性と能力をもった存在だし、人から好かれる人間だと思っている。ところが他人はそれを認めてはくれない。つながりを求めてはいるんだけどそれができない時代なんです。そういう

不安な人にとっては、自分と絶対的に結びつく、自分のことを認めてくれるという人にはドブプリと信頼していつてしまおう。

自分の本当の強さを証明してくれる、明かにしてくれる、道すじをたててくれる、そういう人を信じたなら、絶対的、盲信的にいつていつてしまおう。実際の親よりもつと本当に信頼できるものをもっていると思えらるんです。そのころからはじまったコミュニケーション型の宗教には、家庭や社会や友人を拒否している若者たちが、簡単に入りやすいのです。家庭を捨てろ、社会を捨てろ、ここが本当の家なんだ、俺が本当のお前たちの親なんだ、ということを読む宗教になびくのです。一つの大きな社会の中に別の組織を作つて、そこだけで自活してやつていく、そうした意味での反社会的なんです。社会を否定して、社会に背を向けて、自分たちだけでまともなうという考え方です。社会を拒否している人たちの集まりなんです。

オウム真理教で言えば、麻原彰晃だけが反社会的なのではなくて、あそこに参加している人みんなの意義が反社会的と言えるんです。反社会的とは暴力的という意味ではなくて、社会を否定している、拒否している、無視していることです。実は自分たちが拒否しているんですが、彼らにしてみれば社会から拒否されていると思つてゐる。本当の自分が受け入れられていないと思ひ込んでいる。社会に絶望しているんですね、家族にも、友達にも、そういう人たちが非常に多くなつた社会になつてしまつてゐるということです。

教育制度、偏差値だけで判断するような社会も悪い、教員も本当の意味で教育できない。でも一番の問題は家庭です。親子の関係をきちつとできない。本当の意味で子供と親とが互いに信頼関係をもてないやうにしてしまつた親の責任。人間関係を薄くし、不信任を持たせてしまつたつげが今、回つてきているんだと思います。人間のきずなが断ち切れてバ

ラバラになった社会にでき上がった宗教と言えるでしょう。

ただ、オウムがあのようにな攻撃的な行動に出たのは、麻原彰晃の個人的な性格が強く現われたからでしょう。攻撃的で、すぐカッとなりやすい性格、自分を否定されたら相手をも否定してしまうような自己中心的な性格からでしょう。

ところが彼の作りあげた宗教は今の若い人たちにはとても受け入れられやすい。イニシエーションと称してヨーガをやったり、様々な肉体的な修行を通して深まったり、その深まりというのは超能力を得ることなんです。人間が本当に成就して彼らの言っているその状態に至れば当然神通力を獲得できる、超能力を持つことによって、人は初めて本当の自分になれるんだ、皆んなそれを持つことが生きているうちにできるんだという考え方は、生きること、そして自分自身に自信がない人にとってはその自信を植えつけて

くれることなんです。超能力にあこがれる。あらゆる社会的な制約から自由になりたい。束縛から逃れたい。自分のかくされた力を発揮したい、発揮できるんだ。それを説明している論理がまたすごいんです。

あそこは成就するまでの階段が十四あるというんですね。でも方法を間違えました。LSD使ったとか、メスカリン使ったとか様々に言われている。本当にそうだとしたら、オウムというのは全く宗教的ではないと思うけれども、彼が作りあげた修業システムは今の若い人たちにとっては本当にわかりやすい。現代を映している鏡として、ただ犯罪者集団として非難するだけでは、オウム真理教の持っている深い意味、問題は解決できないと思います。

これから始まる私たちの役割

解散請求が出ましたので数年間のうちにオウムは解散ということになると思われますが、

ただ解散させるだけでは何の効果もありません。いわば犯罪を犯したから社会から隔離して刑務所に入れる、それでよいと思ひ込んでいるのと同じです。犯罪発生する温床と言いますか、社会的な背景を全く無視して、犯罪を犯したら刑務所に入れてしまえば済む、というだけではないのです。咳が出たら咳止めを飲むだけではないんです。なぜ咳が出たのか、原因は何かと考えていかないとけない。それが宗教者の役目だと思ひます。

オウム問題も解散で政治的には解決しても、私たちは解決と考えてはいけません。彼らがああいう教団に入ったという事実は厳然として残るし、その気持ちは彼らの中にずっと残る。社会に家族に友人に自分たちは受け入れられていないんだという気持ちを彼らは持ち続けています。そうした意味で彼らの中にある不信感を取り除くような努力、社会的な努力を教団としても宗教者としてもすべきです。お檀家さんの家族を含めて、人間的なきずなを

さらに深めるような、信頼関係を深めるような努力。今生きている自分への信頼、つながりそして喜びと感謝。親や子や兄弟、そうしたものが皆つながっているんだ、みんな見てくれているんだ、本当にあなたたちのことを思っているんだということを説かなくてはなりません。

彼らを受け入れる会を作ろうとか、あたたくく迎えようなんてことを言っても、実際それはどういうことなのか。それがまず問題です。改宗する人ばかりではありません。もつとさらに自分の心の中に入り込んでしまうかもしれないんです。かえって、居る場所がなくなるだけかもしれません。そういうことを考えなくては本当の意味での解決にはなりません。あの人たちが集まってまた同じことを始めたとしても、犯罪を犯さない限りは信教の自由があるわけだし、私たちも宗教として認めざるを得ない。

私たちがしなくてはならないのは、今の状

況を少しでも修復することです。押し戻すこととです。そういう努力をすべきなんです。それにはまず一番に、「ある家族」から「なる家族」へということ。現代の家族とか家庭という形だけのものから、心が本当にわかり合う形にすることを考え直す必要があります。当然あると思うっている守っていくべき家、先祖というものが若い人たちの心の中にはなくなっているんですから。

そうした中でどのように先祖とか、つながりとか、おかげさまとか、ご縁とか言うことを伝えていかななくてはならないのか。都會型の宗教になるのはいいわけではないにしろ、これから考えるべきことは、お墓を両方の家で作っていくとか、仏壇の中に夫婦両家をお祭してもいいとかといったこともあるでしょう。夫婦なんだから両家を祭って何が悪いと思う気持ちも現代人はあります。この場合「ある先祖」と「なる先祖」ということになるかもしれません。

家族もみんなが集まって週に一度食事をするだけで家庭と言えるのか。親子で談笑しているようにはみえても皆んな違うことを考えていたり、食事が終わればすぐに自分の部屋に引き込む子供たち。そこにあるのは本当に家庭なのでしょうか。いま、家庭を作っていないければならないのではないのでしょうか。

私たちは当然あると思うっているあらゆるものをもう一度見直す必要があると思います。家庭になる、家庭を作る。私たち自身の意識の変化をこうした時代の中で切り替えていかなければ本当に伝統仏教は立ち遅れてしまいます。批判するだけではもういいけません。自らが変わらなければなりません。現にオウム真理教が危険信号を私たちに放ってくれているんです。オウム真理教が危険なのではなくて、実は崖っぷちに立っているという意味で我々が危険なんです。そういう意識の変革というものを大きな方向としてこれから考えていかななくてはならないのではないのでしょうか。

お盆前にブナ林を訪れた。自然を育む森林の王様、ブナの懐にちよっとオジャマした。

本誌連載「共に生きる」で有名な秋田のブナ林に、カメラマンであり、筆も執っていただいた御所野洋幸さんと一緒にさせてもらったのだ。

僕が稚拙な筆でブナ林の素晴らしさを描いても、せっかくのイメージを壊すばかり、御所野さんの写真と文の通りの大自然と報告する以外にない。

唐突だが、むかし自民党の新人議員の励ます会に頻繁に足を運んだことがある。目的は応援演説をする田中の角サンの取材のためだったが、なんと、この角サンに秋田のブナ林で出くわした。

そう、日本列島改造論、だ。ブナ林への入り口にダム建設の計画があるという。

ブナ林を縫う溪流の下流のダムの底に沈む廃村を通りながら、御所野さんが話してくれた。

ブナ林の上流にはすでにダムがあり、ここにはダムの必要性がないにもかかわらず、日本列島改造論の計画は中止されることなく現在に至っているのです。

かれこれ25年前になるが「日本列島改造論」で田中角栄は名を駆せ、政界の頂点を極めた。

当時の日本のニーズをとらえた改造論だった。

きっと今でも日本のあちらこちらに田中角栄の日本列島改造論が息づいているのだらう。改造の善し悪しは時代のニーズの

変化とともにかわってしかるべきだが、一度決めたことを遂行するのは日本人の大いなる美点なのだ。

閑話休題、帰りに盛岡で冷麺を食べた。実は盛岡の名物で、とてもおいしかった。後日、物知りな韓国の友人にこの話をしたら、「盛岡の冷麺の方がおいしくなるでしょうね、すぐに」と言う。緯度が同じで原料を育てる条件も同じだが、日本人の原材料の品質管理は韓国のそれを大きく上回っているから、と彼女は説明してくれた。確かに品質管理も日本の美点。

美点も活かし方次第だが、今後は美点も質を問われそうだ。それにしても思わぬ角サンとの再会には驚いた。

(洋)

ブナ林と角サン



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

■ 誌 上 歌 壇 ■

秋彼岸

お施餓鬼のお説教師にお茶いれる正座のどこかがヒリツと音す

ふと見れば白き帯あり大あわてエンジン音を追つて手渡す

匿名希望 蓮門寺庭(宮城)

組寺への手伝いに行き深夜まで帰らぬ人をただ待っている

青年部はなぜ無いのかしら婦人会今日もこわごわ座して黙せり

すでに秋彼岸の入りは肌寒く炬燵を出して少し親しむ

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六一五 京都市右京区

西京極南衣手町七四

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八

FAX 〇七五―三一五―三七五三

師にささぐ

匿名希望（埼玉）

しんじつふかき思慕なれど
つのおもひはただ秘めむ
もたゆおもひはこの胸に
あふる泪はこのまみに
さはさりながら今も尚
あつき血潮ぞこの胸に
つきぬ泪ぞこのまみに
いのちのはてはありとても

秋

誌 上 投 句

国境祭にて
祭笛一つに揃ひ月のぼる

吉田ゆきえ（東京）

山車の灯の消されて祭果てにけり

入道の姿なきまゝ夏終る

児玉良男（静岡）

名月や伊豆の山脈泰然と

誰か灯を入れて華やぐ地藏盆

児玉仁良（埼玉）

水滴に納めておきし芋の露

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー「J・FORUM」。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもつともつとたくさん作品をお待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先的要領でどんどん応募下さい。私たち編集部では、読書の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。随筆・歌など：四百字詰め原稿用紙十枚いない2俳句・短歌・川柳など：二首まで

3その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせ下さい。…適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

1 十月号でもつともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。

4 その他、ご意見、ご感想などを、官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

●新規会員募集のお知らせ

当会では随時新規会員を募集しています。檀信徒、お知り合いの方々にも本誌のご購読をお勧め下さい。年会費は六千円です。また、ご寺院の皆様方にはなるべく一般会員へのご入会をお願いさせて頂いております（年会費三万円）。一般会員の方には本誌を毎号五部お送りしております。

また、お友達への贈りものにされてみてはなかうでしょうか。ご贈呈先のご住所、お名前をお知

らせ下さい。あなたからのプレゼントであること
をお伝えして発送させて頂きます。きっとあなた
のあたたかいまごころを届けることができるでし
よう。

●新規会員登録紹介（敬称略、順不同）

〈購読会員〉

*北海道 東組 大然寺

*山梨県 山梨組 円通寺

*長崎県 北松浦郡 香林亮積

*埼玉県 上尾市 宇高一薫

〈一般会員〉

*宮城県 第一組 西方寺

●会費ご請求のお知らせ

近日、平成七年度会費をまだお納め頂いていな
い方へご請求をさせて頂きますので、同封の振込用
紙にて、忘れずに、お早めにご送金下さいませよ
うお願い致します。なお、ご不明の点はお尋ね下
さい。

●バックナンバーのご案内

一昨年四月号以降のバックナンバーがございま
す。ご希望の方、また掲載内容をお知りになりた
い方お問い合わせ下さい。なお、一九九四年二、
五、十一月号は残部僅少につき、お分けすること
ができませんので、あしからずご了承下さい。

●おわびとお願い

実務上の都合により、送付・配本が多少遅れが
ちになり、誠に申し訳ございません。何卒ご理解
頂きますようお願い致します。

また、本誌は万全を期して発送致しております
が、万一不足、乱丁、落丁などがございましたら
お手数ですが事務局までお知らせ下さい。早速、
追加発送、お取り替えをさせて頂きます。

アンケート、お問い合わせ、投稿は…

法然上人讃仰会

〒一〇五 東京都港区芝公園四―七―四

明照会館内

TEL 〇二―三五七八―六九四七

FAX 〇二―三五七八―七〇二六



山道で初めて気づく月明かり

岱潤

月の美しい季節を迎え、浄土宗の各寺では十月会が行なわれることでしょう。

先日茨城県の牛久に、「橋のない川」の著者で有名な、作家の住井すえさんを訪ねました。

今年九十三歳におなりになるとのことですが、大変お元気で、一時間以上にわたって私たちにお話しをして頂きました。昨年永六輔さんと出された人間宣言（じんかんせんげん）の冒頭に、永さんが引いた話を思い出しました。

「金さん銀さんの担当記者が、あの二人最近収入があれ程あるのに使っている形跡がないので、聞いてみたんです。金さんはただにこにこしていましたが、そこで銀さんに聞いてみたら、老後のために貯蓄していますと言ったんです。あの二人まだ老後だと思っていないようです。」

永さんもこのお二人と住井さんが同じであるというこで、この話を引用されていますが、私もまったく同じ印象を持ちました。

住井さんがある日一日中蜘蛛の巣を観察した体験から、おもしろいお話をしてくださいました。そしておっしゃいました。

「いい話でしょう、この話私の晩年の作品に書くつもりなの。だからまた書かないでとってあるの。」

何とも元気なおばあちゃんでした。そして社会に対して批判は鋭くしますが、人間関係、家族や出会いの人々に対する不平、不満がまるでないという姿勢を感じました。これが長寿の秘訣かもしれないですね。敬老の日にお茶を飲んでいる姿よりも、体育の日に体力測定をしているお年寄りの方が現代のようです。

（長）

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

齋藤晃道

栗田順一

村田洋一

太田正孝

石上俊教

佐山哲郎

編集協力

オフィス頼代代表 佐山哲郎

編集顧問

大室了晴

浄土

六十一巻十月号 頒価六百元
年会費六千元

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成七年九月二十五日

発行 平成七年十月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社 平文社

写真植字 株式会社 シーティーイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八 六九四七

FAX 〇三三五七八 七〇三六



使えるよなあ、こいつ。



こんどのパルサーは、 たのしい新実用主義。

○ いろんな機能性に、ヨロコビがあるのが嬉しいのだ。それが、
○ こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり遊ぶ、
○ しっかり仕事する。しっかり生活する。Mr.しっかりのこれからを、
○ 気持ちよくサポートします。

これ安心

■運転席SRSエアバッグ
システム全車標準装備。



走る走る

● 快走: マルチリンクビームサスペンション (Vサ)
● うれしい低燃費 → 1500X (15速フロアシフト)
18.2km/ℓ, 1500REZZO プライマリー (5速
フロアシフト) 19.8km/ℓ (10-15モード燃費/
運輸省実燃)

らくちん

● 上質感のある、しなやかな乗りこさ。
● ゆったり室内スペース。

ツイてる

● 新型エアコン
● トランク、ポケット等、収納性しゅうじん。

パルサー4ドアセダン
1500CJ (15速フロアシフト)

131.3万円

パルサー4ドアセダン
1500X (15速フロアシフト)

148.4万円

※上記価格はメーカーオプション (ナビゲーションシステム 13.1万円) が含まれておりません。

※上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格 (税別、北海道・沖縄)

Mr. しっかり 新パルサー誕生

【Mr.しっかり】日常フダン活用。①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。
③～状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

● PHOTO: パルサー4ドアセダン1500X1。ボディカラーはブルーオーシャンパールM (※801)。スポーツパッケージは
メーカーオプション。●希望小売価格はスペアタイヤ・標準工賃付。車両地仕様は1.7万円高となります。●保険料、
税金 (消費税込含む)、登録等に付く諸費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が
独自に決めていますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。●日産自動車 お客様相談室 全国共通
フリーダイヤル ☎0120-315-230 ●お車の方は、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産ディーラー各販売会社へ。



ノドうつ うまさ。 黒ラベル

ただいま、渴いています。ビールを欲しがっています。

ノドが、体が……。さて、黒ラベル。プシュッ！ゴクゴクゴクゴク……。

「あーッ生きてよかったーッ」と、声が出る。

このうまさは、何なんだ。ノドたたく快感、

駆けぬける爽やかな味わい。1秒1秒が、

たまらない喜びに満ちている。

この黒ラベルの味、ひとことという？

「ノドうつ、うまさ」。それが黒ラベルです。

ビールは、20歳になってからあきかんはリサイクルへ

●協力：朝日、自動販売機による酒類の販売は午後1時から午前5時まで停止されています。



サッポロ(生)黒ラベル

サッポロビール株式会社

